

News from Nowhere の成立過程

宮 井 敏

William Morris が友人の Bruce Glasier に宛てた手紙に “I suppose you have seen or read, or at least tried to read, ‘Looking Backward.’ I had to on Saturday, having promised to lecture on it. Thank you, I wouldn’t care to live in such a cockney paradise as he imagines.” (1889, May 13th)¹ とあり、その前年1888年にアメリカで出版されて異常なまでの反響をまきおこした Edward Bellamy (1850-1898) の *Looking Backward 2000-1887* (1888)² がすでにロンドンでもかなりの話題となっていたらしいことがうかがえる。この時の “lecture” の内容は保存されていないが、この手紙から一ヶ月後の1889年6月22日には彼は自ら編集する Socialist League の機関誌 *The Commonweal* 誌上にこの作品に対する長文の批評を掲載し³、紀元二千年には何等の革命も経ずして整然とした中央集権的管理社会が実現するという著者の未来像に強く反撥したのであった。そして翌1890年1月11日付同誌から *News from Nowhere* の連載を開始した⁴ というのもこれが単なる批評にとどまらず別のユートピアの構築でもってのはじめて答えうる一つの挑戦だとモリスにはうけとられたからであった。

もっとも、A. L. Morton も指摘するごとく⁵、よし *News from Nowhere* が *Looking Backward* に触発されて書かれたものであるにもせよ、もともとこのユートピアが「永年モリスの心のなかで熟成しつつあったものに形式と内容を与えることによって出来上がった」ものであることも又あきらかであろう。これより四年前、同じ *The Commonweal* 誌上に連載した *A Dream of John Ball*⁶ の最後のところで、「私」と別れるに際して John Ball が

“...and scarce do I know whether to wish thee some dream of the days beyond thine to tell what shall be ...”⁷ とのべているのも、かつて指摘したごとく、⁸ モリスにはこの作品によって理想化した過去に照らして現在を批判し、次の作品によって現在の変革を通して未来を展望しようという総合的な意図があった事を示している。

ところで、このユートピア・ロマンスが一応彼の代表作となっている以上これまでののはなはだ変化にとんだ作者の全体験がこゝに集中的に表現されているであろうことも又論をまたない。Thomas Carlyle のはげしい資本主義批判、John Ruskin の St. George's Guild の構想、Francois C. M. Fourier の労働歓喜説、Petr Alekssevich Kropotkin の anarchism、Karl Marx の『資本論』（仏訳のもの）、Freidrich Engels の『空想より科学へ』（仏訳のもの）、Henry George の *Progress and Liberty* に見られる地租単税論などモリスがそれまでに学びとった、十九世紀イギリスに大きな影響を与えたさまざまな思想に加えて、Social Democratic Federation や Socialist League を通じての社会体験、アイスランド民話の収集調査、とりわけそこに見られる「無階級社会」へのつよい関心、工芸家としての創作活動・制作事業、ロマン派詩人としての発想、観察眼など、彼のすべての全人格的活動が渾然一体となってこのユートピア社会建設の資材となっているのである。

従って、この *News from Nowhere* を成立せしめているさまざまなファクターをあれこれとり出して種々の影響関係を論ずることは必ずしも当を得たことではないのであるが、直接の契機となった上記 *Looking Backward* は別として、今この作品の背後にあるユートピア小説を考えると、そこにいくつかのものが浮かんで来る。Thomas More (1478-1535) の *Utopia* (1516)、Samuel Butler (1835-1902) の *Erewhon* (1873)、Richard Jefferies (1848-1887) の *After London* (1885)、William Henry Hudson (1841-1922) の *A Crystal Age* (1887) などであるが、もともと *News from Nowhere* 自体がイギリス・ユートピア文学の正統につながるものである以上、そこにこ

うした過去の名作，同時代の作品が影を落していることも又当然のことといえよう。

モリスの標準的伝記である J. W. Mackail の *The life of William Morris* の1882年の項に「トマス・モアの『ユートピア』はモリスの秋の日の休日に Kelmscott でたびたび朗読されたものであり、彼に少なからぬ影響を与えた書物である、多分カール・マルクスの『資本論』よりは。」とある。⁹ モリスの socialist としての側面をなるべく避けて通ろうとするマッケイルのいつもの偏見はこの際おくとして、ともかく『ユートピア』が彼の生涯を通じての愛読書の一つであったことだけはまずたしかめられよう。1893年9月、自ら経営する Kelmscott Press からこの書物を印刷する（出版は Messrs. Reeves & Turner から）に際しても、モリスはあえて一文を草してこれに附している。その中で彼は「この書物は社会主義者の本棚にとっては不可欠のものである」と言い、「諸条件がすべて平等である社会への憧憬と、自分もその一員である共同体とは切離しては自分の存在が考えられないような社会を実現しようとする願望とがこの書物のエッセンスであり、それは又今日我々が戦っている戦いの目的でもある」¹⁰とのべている。“utopia”という言葉を自ら造語し、かつその名を冠する作品第一号をかいたモアに対する作者のなみなみならぬ傾倒ぶりが示されている。

次のバトラーの *Erewhon* についてもマッケイルは、「モリスの青年期からの愛読書リストに最近になって（1873年の出版後）新らしくつけ加えられたお気に入りの書物であった」と言い¹¹、Philip Henderson も又、「モリスはバトラーの *Erewhon* における哲学的ユーモアをいつもたのしんでいた」¹²とのべ、「病気を罪とし、犯罪を病気だとする『あべこべ物語』の価値観の転倒という手法と、作者のきびしい反機械主義には少なからず影響されるところがあった」と指摘している。

一方、ジェフリーズの *After London* については、いつもの相談相手である親友の Burn-Jones の夫人にあてた手紙（1855, April 10th）のなかに、“I

read a queer book called *After London* coming down ; I rather liked it ; absurd hopes curled round my heart as I read it.” とあり、ひどく興味を抱いていた事がうかがえるが、この未完の小説のあるべき結末についても、“I rather wish I were thirty years younger ; I want to see the game played out.”¹³と一方ならぬ関心を示しているのである。

さて以上の三つのユートピア作品については作者の直接の発言なり、伝記作者の紹介なりでモリスがつよく感銘をうけたであろう事をたしかめ得たわけであるが、残る一つのハドソンの *A Crystal Age* については刊行されたモリスの全書簡、全作品中に直接の言及はない。ただモートンの類推があるばかりである。彼は云う。「直接の証拠こそないがモリスが1887年初版の『水晶時代』を読んでいたかどうか、知りたいところである。事実はおそらく読んでいたものとおもわれる。」¹⁴ つまりハドソンは Wilfred Scouen Blunt と、R. B. Cunningham-Graham と親しくしていたから、そのどちらかを通じてモリスはハドソンのことを聞いていたにちがいない、というのがモートンの推論なのである。¹⁵

この兩名のうち、少くとも後者についてはモリス、ハドソン両者の共通の友人であった事が確認出来る。かつて南米のパンパズで生活したことのあるこの人物は旅行家、作家、寄稿家であり、¹⁶またのちに North West Lanarkshire 選出の急進派の国会議員となり、労働運動にも参画した人であるが、モリスの生前から親交を深め、没後、Arthur Compton-Rickett があらわした評伝、*William Morris, a study in personality*¹⁸ には懇切な長文の序文を寄せている。一方また、パンパズでの生活体験が彼とハドソンとをむすびつけ滅多に自著を dedicate しなかったハドソンをして、南米を舞台とする短篇集 *El Ambú* (1902) を献呈せしめ、¹⁹のち一冊の書物となるほどの手紙を書かしている (*W. H. Hudson's Letters to R. B. Cunningham-Graham*)²⁰ のである。こうした事からも、このカニンガム・グレームがモリス・ハドソン間の橋渡し役であったであろう事は充分推察されるが、さらに、この熱血

漢はモリスも居合せた1887年11月13日の Trafalgar Square における例の Bloody Sunday の暴動では警官隊と衝突して逮捕されている。²¹ モリスはこの時の犠牲者 Alfred Linnell の大衆葬にはグレアムと共に Pall-bearer (棺側の随行者) をつとめ、²²更に彼の釈放に際しては Pentonville Gaol へ自身出迎えに赴いている²³ が、一時期のモリスの活動に終始行を共にした人物であった。下って1925年、ハドソンの死の翌年の5月19日、Hyde Park の一隅でハドソン記念碑の除幕式がボールドウィン首相の手によって行なわれたが、翌20日 Times 紙上で追悼の一文を草したのが他ならぬこのカニンガム・グレアムであったのである。

従って、グレアムを通じてのモリス・ハドソン間の直接の接触には十分な可能性があり、モリスがハドソンの『水晶時代』を読んだに違いないとするモートンの推測にはかなりの信憑性があるものと見なければならず、ハドソンの伝記作者 John T. Frederick も又この点で意見を同じくしているのである。²⁴

さて、では以上検討を加えたモリスが愛読した、もしくは読んだ筈の四つのイギリスのユートピア小説——一つは古今を通じての代表的ユートピアであり、三つは彼と時代を共にする作品——から *News from Nowhere* の作者が得た suggestion はいかなるものであったであろうか。このうちバトラーのものについては別個に考えねばなるまい。と云うのは、たしかに『エレホン』は通常の観念をさかさまにするという衝撃的なやり方で既成の価値観を否定して見せ、その事が現状否定的な発想に立つモリスを喜ばせはしたが、そして具体的には *News from Nowhere* の第六章末尾でそれを模倣して見せはしたが、所詮は『エレホン』は諷刺的ユートピアであり、諷刺はモリスのとりどころではなかったからである。かって指摘したごとく、²⁵もし「諷刺が非力を前提とした自己主張の芸術的表現」であるとすれば、実践的社会主義者たらんとするモリスには無縁のわざであり、又、性格的にも、半ば逃避の姿勢から間接に「事物を諷する」ことは彼には到底出来ない相談で

あったらうからである。

残る三つのユートピアから自分のユートピア社会建設に当ってモリスが得たヒントは何か。つきつめていえば「破壊を通じての建設」というユートピアの成立過程の問題に外ならない。理想社会は既存の社会の部分的補正によって成立するものではなく、現実の徹底的破壊によってのみもたらされる筈だという、日頃抱懐する彼の信念をこれらのユートピア物語によってさらにたしかめ得たという事であろう。云うまでもなくモリスはモアの『ユートピア』から多くのものを学んだ。その第一部における、前期的資本主義批判であり、厳格法治主義否定であり、王侯戦争反対であった。更には知識人の政治参加であり、私有財産否定であり、非妥協的改革の重要性であった筈である。また第二部からはユートピア社会における法律制度、政治組織、経済機構であったであろう。けれども所詮は Henry VIII の大法官トマス・モアと十九世紀の詩人ウィリアム・モリスとでは共通点は少ない。一は英国王の国教会設立に反対して処刑されたカトリック教徒であり、一はしばらくこそは Anglo-Catholicism に傾倒しても 棄教ののちは communist を自称した社会主義者である。ユートピア島における禁欲的な「エロスの虐殺」を見ても、奴隷労働を見ても、また画一的な管理機構を見ても、安楽死制度を見ても、いづれもエピキュリアン、アナキスト、ロマンティスト・モリスの到底とるところではなかった。従って実際にモリスが『ユートピア』から借用したアイデアはそう多くはなかったのである。むしろモリスは管理制度の強化統制によって社会を成り立たしめているモアの『ユートピア』と、科学技術の発達によって社会を建設しようというベーコンの『ニュー・アトランティス』のいづれでもない、第三の理想社会を作ろうとしたのではなかったか。モリスは偉大なりし先人達、二人の大法官に深甚なる敬意を払いつつ二つのユートピアのジンテーゼを試みたと見るべきであろう。そうだとすれば、モリスが肯定的に活用した『ユートピア』からのヒントはつまるところただ一つ、第二部第一章冒頭におけるユートピア島成立の状況のみと考えられるのである。

位、人臣をきわめたモアには、否最高の顯職にあったモアなればこそ、理想社会の建設は現状の徹底的破壊によってのみ可能であることをよく知っていた。体制の頂点にあった人物が、かえて部分的補正の無意味さを熟知していたのである。そのために第二部でユートプス王が「平定者として上陸するとすぐに大陸とつながっていた半島部分の土地を15マイル掘りおこさせ、海が島をかこむようにする」²⁶ ことによって、旧名「アブラクサ島」を捨てて、ユートピア島としてスタートさせた、というのである。これはいみじくも、現実の社会と断絶し連結するというユートピア社会の本質を端的に象徴している。このことが、凡百のユートピア物語に散見するほしいまな思いつきや面白半分のおそびでない証拠には、この書物の扉絵にあるユートピア語で書かれた戯詩にも、“Vtopus me dux ex non insula fecit insulam.”（ラテン語の訳），“Utopus, my ruler, converted me, formerly not an island, into an island.”（その英訳）とあり、この島の成立過程がユートピア社会の建設にあたってきわめて重要であることが重ねて強調されているのである。この描写によって、既存の社会（大陸）とつながっていた（半島）ことは事実であるにもせよ、それと一度は断絶（掘割開削）しなければ理想郷（島）は成立しない、とモアは主張しているのである。

同じようなことがジェフリーズの *After London* についてもいえる。前掲の書簡の二週間後に再びこの小説についてのべた手紙²⁹（1885年5月13日付）にあきらかなように、モリスは荒廃したロンドンの姿に十九世紀イギリスの末路を見たのであった。「パーバリズムが今一度この世を覆い、いかに粗野であろうとも本物のパッションが激情や偽善にとってかわる時代が来るのです。これまでおろか者が進歩だと称しているしろ物がそれなりに出来上ってゆくのだと考えて絶望したのですが、幸いにもそうしたものすべてに突然の——少くとも外見上は突然の——終りが来るのです。あのノアの時代のときのように。」

元来この *After London* という一風変わった小説は未完のせいもあり、また

essayist としてはさておき novelist としては遂に成功しなかったジェフリーズの作品だということもあって、ユートピアとして何等かの具体的な社会像が示されているわけではない。むしろ “or Wild England” という副題が示すように、恐怖の未来小説乃至は dystopia と呼ばれるべき作品であろう。作中でははっきり示されていない何かの天変地異のためにブリテン島の地形に大きな変化があり、テムズ河が氾濫して一大湖水となり、すべての文明は消滅してしまっていて、ただ深い森の中と湖畔の一部に点々と少数部族が散在しているという状態がジェフリーズの得意とするこまかな風景描写と共に淡々と語られているにすぎない。もともとジェフリーズには primitivism の傾向があり、古代社会へのあこがれが非常に強く、代表作である familiar essay, *The Story of My Heart* (1883) のほとんど各章ごとに紀元前から五世紀初頭にかけてのローマ占領時代の各地の遺跡に佇んではるか原始の古えに思いをはせるところが記されている。³⁰ そうした反文明、反進歩的な primitive barbarism が今度は未来の方向に投影されて、すべての十九世紀文明が破壊されつくしたあとのロンドン乃至は南イングランドの原始に帰った姿を描かせたものであろう。従ってこの作品の場合もモリスにとっては、現行の機械文明、産業社会が必ずや一度は崩壊するであろうという一種終末論的な確信と、マルクスが予言する資本主義経済体制の必然的崩壊という暗示をいわば顕在化し、かつ視覚化するという引き金の役目をはたしているわけである。モートンは物語の最後にある遊牧民族のなかから新しい部族国家が誕生する姿にかすかながら希望を託しているが、実際には作中で Aquilas の一族 Felix が対立する部族の娘 Aurora と新しくみつめた湖畔の土地に新しい社会を建設する可能性はほとんどなく、元来構想力のあまり強くないジェフリーズには、よし物語を完結していたとしても、それはあまり期待出来ない筋立てであったであろう。そうした千年王国的期待感よりも、ここでモリスが得たものは、大自然の超越的な力によって破壊されつくした人類文明の荒廃そのものであり、その姿が部分的修正よりは徹底的改革を、改良よ

りは革命を考えるモリスに大きな暗示を与えたものであろう。

最後のハドソンの『水晶時代』³¹についてもほぼ同じことが考えられる。crystal age という名前が示すように、この作品では争いも戦いもない静かで透明な原始の大家族制社会の姿がくりひろげられる。筋らしい筋とてなく Felix の Aurora に対する愛よりはさらに淡々とした、ほとんど性愛を含まない主人公 Smith の Yoletta に対する愛が筋といえば筋らしい運びになっているだけのことである。一種の家父長制のもとで自然教らしき原始宗教を信ずるこの一団の生活にはユートピアらしい社会制度や経済機構は何一つ語られておらず、管理統制もなく、ただ、個々人が自覚するままに、いでは耕し入りては眠るというアルカディアの世界が描かれている。従ってもしモリスがこの作品から得たものがあるとすれば、それは、After London から学んだ破壊されつくした荒廃の姿とは違って、さらにそのはてにあるコミュニケーション幻想と静止の時とであろう。最適社会の適限を守る村落共同体に、巨大社会の管理機構と中央集権のアンチテーゼを見ようとするモリスにはその状態が相対的に静止しているのを知る。News from Nowhere の副題は “or an epoch of rest being some chapters from a utopian romance” というのであるが、ここに云う「休息の時期」とは、さらによりよき社会へと向う前進の途中にある相対的な静止の時間を示しており、このユートピアが決して自己完結的な最終形態をあらわすものではない事を物語っている。従ってこの『水晶時代』は休止の時間の中で静寂の空間を示してみせたという点では充分一つのヒントとなり得たと想像されるのである。

ところで News from Nowhere にはこのユートピア社会の成立前後の状況をつぶさに描いた “How the Change Came” と題する一章がある。革命による新社会建設のプロセスを想像によって描いたものの中でこれ以上のものはあるまいとして従来評判の高い箇所であるが³²、同時に又これはユートピア物語の中でそのユートピア社会の成立過程を示して見せたという点でまことにユニークな箇所でもある。今までのユートピアのほとんどは、すでにこ

の地上のどこかに存在していた理想社会を、架空の旅行か航海の途中で偶然発見するという形をとっている。あるいはそういった想像空間を他に求めないで筆者の住む国家・都市をそのまま基点とする場合には何らかの超自然な力又は S. F. 的な状況の飛躍によって過去か未来の時代がそこへ招来するという筋立てになるものである。その点、この *News from Nowhere* ではユートピアはこの第十七章で示されるはげしい戦いと何回かの挫折後退ののちに構成員の意志と努力によってまさに勝ち取られたものであるという形になっている。モアは十六世紀のイギリスにあって、平等社会への願いという点ではモリスとおそらくは想いを同じくしながら、このような闘争スケジュールは想像も出来なかったし、又、大法官という職責上許されもしなかったであろう。まして社会構造上の「上からの大改革」というものは毛沢東の文化大革命以前には何人も考え得なかったことである。そこでモアは半島を大陸から切り離すという *allegory* によって現実からの断絶を示し、変革による新社会建設を象徴的にあらわそうとしたのである。バトラーは価値観を逆転せしめてあべこべ社会を描くという離れ業を演じてみせたが、具体的な変革プランを持たなかったために、いうなれば批判はなし得ても対案を示し得なかったために諷刺にとどまってしまった。ジェフリーズは現実の社会の徹底的破壊と仄かな再生のあかりを描いて見せはしたが、その破壊エネルギーによって来たるところを提示しなかったために単なる *fancy* に終わってしまった。³³ ハドソンは現実との徹底した断絶を強調して静止の時空をつくり出したが、積極的に問題を提起する姿勢に欠けていたために一個のイリュージョンにとどまってしまったのである。ひとりモリスはこうした先人・同時代の作品からさまざまに学びつつ、直接的には *Looking Backward* に刺激されて、社会主義体制への平和的移行という未来論的ヴィジョンに反撥して、歴史の非連続的發展の一つの例証として彼のユートピア社会をその成立過程から含めてえがき出したのであった。

註

- 1 J. Bruce Glasier, *William Morris and the Early Days of the Socialist Movement* (London: Longmans, Green & Co., 1921), Appendix, p. 198.
- 2 Edward Bellamy, *Looking Backward, 2001-1887* (N. Y.: Mod. Lib., 1888).
- 3 William Morris, "Looking Backward," *The Commonwealth*, 22nd June 1889, Vol. V, No. 180, p. 194 & ff.
 May Morris, *William Morris, Artist, Writer, Socialist* (Oxford: Russell & Russell, reprint 1966), Vol. II, pp. 501-507 に収録。
- 4 完本は William Morris, *News from Nowhere, or an Epoch of rest* (London: Routledge & Kegan Paul, 1890).
- 5 A. L. Morton, *The English Utopia* (London: Lawrence & Wishart, 1969), VI. "The Dream of William Morris," p. 202.
- 6 William Morris, *A Dream of John Ball* (London: Longman & Green, 1888).
- 7 *ibid.*, p. 167.
- 8 拙論『William Morris の Past Utopia』同志社大学英語英文学研究, 11号。
- 9 J. W. Mackail, *The Life of William Morris* (London: Longmans, Green & Co., 1912), Vol. II, p. 95.
- 10 May Morris, *op. cit.*, Vol. I, p. 290-291.
- 11 Mackail, *op. cit.*, p. 96.
- 12 Philip Henderson, *The Letters of William Morris to his friends & family* (London: Longman & Green, 1950), "Introduction".
- 13 *ibid.*, p. 223.
- 14 Morton, *op. cit.*, p. 266.
- 15 逆にハドソンがモリスのユートピアをのちに読んだことはたしかなようである。1887年に出た *A Crystal Age* にかなり手を加えて1919年に出された再版の自序の中でハドソンは, "Nevertheless, we cannot suppress all curiosity, or help asking one another, What is your dream—your ideal? What is Your News from Nowhere...?" とある。
- 16 柏倉俊三『ハドソン』(研究社英米文学評伝叢書, (74), 昭9)。
- 17 E. P. Thompson, *William Morris, romantic to revolutionary* (London: Lawrence & Wishart, 1955), p. 576.
- 18 Arthur Compton-Rickett, *William Morris, a study in personality*, with an Introduction by R. B. Cunningham-Graham (London: Herbert Jenkins, 1913).
- 19 W. H. Hudson, *El Ambú* (London: Duckworth & Co., 1902).

- 20 Richard Curle ed., *W. H. Hudson's Letters to R. B. Cunningham-Graham* (London: Golden Cockerel Press, 1941).
- 21 E. P. Thompson, *op. cit.*, p. 576, 更に P. Henderson, *op. cit.*, p. 278 n.
- 22 *ibid.*, p. 579.
- 23 P. Henderson: *op. cit.*, p. 279.
- 24 John T. Frederick, *William Henry Hudson* (N. Y.: Twayne Publishers, Inc. 1972), p. 43.
 “The Crystal Age (原文のまま) is most closely approached in structure, in tone, in the nature of the utopia described and in style, by William Morris' *News from Nowhere* (1891), and I think it wholly probable that Morris knew Hudson's book.”
- 25 拙論, 前掲書.
- 26 沢田昭夫訳『ユートピア』(中央公論社, 世界の名著 17), p.401.
 なおこの沢田訳は *The Complete Works of St. Thomas More* (Yale Univ. Press) Vol. 4 ed. E. Surtz & J. H. Hexter を原典とするラテン語からの直訳であるが, 1551年, Ralph Robinson が英訳したいわゆるロビンソン訳による岩波文庫, 平井正穂訳によれば, この肝腎の箇所がまるで意味をなさない。「まず第一に着手した事業は海岸からずっと奥まった内陸の土地を15哩の幅にわたって開きくし, 海をもって一面にこの島をとりかこむことであった」云々。
- 27 E. Surtz & J. H. Hexter, *op. cit.*, p. 18 & f.
- 28 Richard Jefferies, *After London* (London: J. M. Dent. Everyman's Library 951, 1885).
- 29 P. Henderson, *op. cit.*, p. 236.
- 30 Richard Jefferies, *The Story of My Heart* (London: Longmans, 1883).
 “There was an intrenchment on the summit...” (Chap. I), “... immediately the ancient wall swept my mind back seventeen thousand years to the eagle, the pilum and the short sworel.” (Chap. II), “There were grass-grown tumuli on the hills ... Some warriors had been interred there in the ante-historic times.” (Chap. III). etc.
- 31 W. H. Hudson, *A Crystal Age* (London: Duckworth & Co., 1919), 2nd Edition.
- 32 小野二郎『ウイリアム・モリス』(中公新書 336, 昭48), 第5章, p. 168.
- 33 *The Essential Richard Jefferies*, selected with an Introduction by Malcolm Elwin, (London: Jonathan Cape, 1948). “Introduction.”
 “Without form or finish *After London* can hardly be described as a novel...”

Synopsis

How did Morris write *News from Nowhere* ?

Bin Miyai

It is a well-known fact that William Morris wrote *News from Nowhere* as a literary refutation against Edward Bellamy's *Looking Backward*, published in 1887 in the United States of America. But it was the author's original plan to write a utopia of the near future, making the contrast with another kind of utopia, *A Dream of John Ball* by picking up the idealized situation from the medieval past, two or three scenes from the peasants' revolt in 1381 by John Ball and Watt Tylor. Ball says at the end of it, "scarce do I know whether to wish thee some dream of the days beyond thine to tell what shall be." But beside this fact, two novels were helpful for Morris to write down his utopia : Richard Jefferies' *After London*, and William Henry Hudson's *A Crystal Age*. From both the author got a suggestion about the concrete image of deserted London after the thorough destruction of the civilization. These romances suggested him that construction through destruction was the only way to make ideal society for the human being. Morris tried to depict how the idealized society came into being through the severe struggle, contrary to the conclusion of Bellamy's *Looking Backward*. *News from Nowhere* is the only utopia to have the minute description about the process of its construction, as in Chapter Seventeen, "How the Change came."